

DSRCとインフラ協調安全システムの特徴

2007年3月22日
トヨタ自動車株式会社

DSRCは、スポットエリアでの車両ID認識機能を用いた、利便性向上のアプリケーションに適している。一方、今回提案している「インフラ協調安全システム」は、交通事故削減を目的とした、安心・安全用途でのアプリケーションサービスに適している。

	DSRC(5.8GHz)	インフラ協調安全システム(UHF帯)
通信形態	路車間通信	車車・路車間共用通信
主な用途例	快適・利便 ・ETC ・道の駅情報提供サービス (道路交通情報、地域・観光情報 など) ・決済サービス(公共駐車場、給油所 など) ・バスロケ ・路車間通信による情報利用システム (前方障害物情報、前方状況情報、合流支援 など)	安全・安心 ・車車間通信による情報利用システム (出会い頭事故、右折事故、左折事故、正面衝突事故、追突事故、車線変更事故、歩行者事故) ・路車間通信による情報利用システム (信号情報、規制情報、歩行者情報 など)
通信エリア	10～30mのスポット的エリア 1	数100m～数Kmの広域エリア 2
備考	1 5.8GHzはUHF帯に比べて電波の直進性が強く、他車の影などによるシャドーイング対策が重要であり、物理的に通信エリアを限定したスポット的サービスが適切	2 安全・安心サービスの情報は、広域エリア内を連続的に通信する必要があり、交差道路の見通し外の車両との車車間通信や、遮蔽物によるシャドーイングの影響を受けにくい路車間通信が可能なUHF帯を用いた通信により、事故削減が期待できる。